

書 評

青年心理学書から

秋 葉 英 則 (大阪教育大学教育学部)
Hidenori AKIBA (Osaka Kyoiku University)

書評にはそれなりの形式があろう。

本稿は、その形式にとらわれずにまとめたという願望を赦して下さい。それ故、いわゆる書評という枠組からもしかしたら逸脱するかもしれません。

こうした要請をあえておこなう理由は、

①私自身の研究分野（青年心理学）にこだわっての文献研究でありたい、から

②私自身の研究展望をもちたい、から。

もちろん、学会誌の書評は、このいずれの要件も準備されることでしょう（“私自身の”にひきよせる力に強弱があろうとも）。にもかかわらず、こうもこだわり、赦しを乞う理由は、青年心理学の研究分野故（他の場合にもあてはまるかもしれませんが）のことかともおもうのであるが。

ここ数年の間に内外で公刊された青年心理学関係の文献に、書評に耐えうるものがない、などというのではない。

むしろ、青年心理学史の中で1960年代、70年代は「画期的な20年」であった（後述）。しかし、それらの諸業績は、これまでの研究の総括に終り、新たな研究の展望を明らかにしえていないこともまた事実である。

私が、「画期的な20年」とよぶ、この間に、いみじくも H. Thomae (1974)¹⁾ が、「青年心理学は現代の発達心理学の主要な領域に属していない」現状を憂いて、“混迷ともいえる現状”と称した状況は今なお続いているといえよう。

私自身は、自分の力量をかえりみず、この状況を打開すべく方策を考えずにおられないのである。なぜなら、わが国のみならず、今や多くの国々にあって青少年問題は、かつてない深刻な状況にあり、青年心理学（青年期研究の主要な領域として）に求められている社会的実践的課題が増しているからにほかなりません。

こうした問題意識をもって“青年心理学書から”と題して注目すべき3つの文献をあげ、「書評」を記させて

頂きたい。

私は、H. Thomae (前述) の指摘は今日の世界の青年心理学研究の動向と青年心理学の課題を的確に述べているとおもう。もちろん、だからといって、今日の青年心理学の諸研究が「混迷」の状況にのみあるとはいえない。その理由は、後述するような青年心理学界の動きがあるからである。

今、その動向に期待をもちながら、2つの疑問を青年期研究（者）になげかけたい。

①何故に、青年期研究に発達の観点がこうも欠落してきたのだろうか。

科学としての青年心理学の誕生を G. S. Hall (1904) に発見するならば（異論もあろう）、彼の青年論が反復説に立ち、ルソーの影響（『エミール』1762）をうけて青年期を“第2の誕生”（new birth）と位置づけたことはあまりにも有名である。しかし、その後の青年心理学書はルソーの見解を総論で肯定し、各論にその発達の視点を欠くという状況は何故なのだろうか（ホルルの発達観には問題はあるが）。

私は、今なお、ルソーの『エミール』の青年分析は生きていると確信をもつ一人である（ルソーは、教育学徒に魅せられ、心理学徒には、真の支持者をもたないようにおもえる）。

ルソーは、青年期の到来を人生の中で次のように描き、意味づけている。

「わたしたちは、いわば、2回この世に生まれる。1回目は存在するために、2回目は生きるために。はじめは人間に生まれ、つぎには男性か女性に生まれる。（中略）暴風雨に先だってはやくから海が荒れさわぐように、この危険な変化は、あらわれはじめた情念のつづきによって予告される。にぶい音をたてて醗酵しているものが危険の近づきつつあることを警告する。気分の変化、たびたびの興奮、たえまない精神の動揺が子どもを

ほとんど手におえなくする。まえには素直に従っていた人の声も子どもには聞こえなくなる。それは熱病にかかったライオンのようなものだ。子どもは指導者をみとめず、指導されることを欲しくなくなる」(今野一雄訳 岩波文庫 中)。

ルソーの発達観は、ロック以降の経験主義にもとづくものであるが故に、今日的にいえば問題を残してはいるが、子ども・青年の生態・発達の相をみごとに描いているといえよう。その意味では、今日なお、生きている。

しかし、このルソーにはじまる青年期の発達の分析は、弱まるこそあれ、強まることのないまま今日に到っている。その理由はどこにあるかを問う労苦以上に、青年期の発達論の追求を強調することの方が困難な学界動向に、私は疑問をもっているのである。

②何故に、今日の青年心理学は、今日の青年問題を理論的実践的課題としてかかえこうとしないのか。

かつて、ホールが、20世紀初頭のアメリカの社会的状況とそこにかかえる青年問題を直視することから青年心理学を構想したように、さらには、ドイツ青年心理学の基礎を築いた E. Spranger (1924) が、ファシズムにゆれ動く青年問題をうけとめた事実(その解析に誤ちがあろうとも)を、今や、失ってしまったかのようにすらおぼえるのは、私ひとりではなからう。

“暴力”なる用語を子ども・青年の行動に一般的に(家庭内暴力、校内暴力)かつ抵抗なく使用している時代は、かつてない。少なくとも、わが国にあって、わが国の公教育・中等教育の歴史の中にあってははじめてのことであろう。その時間的経緯もほぼ10年間にもおよんでいるのである(いわゆる戦後の非行のピークを数えて、今や、第3のピークにさしかかっているというが、その端初は1974年のことである)。

この傾向が、青年期のいつ頃に発生しやすいのか、そしてまた、その発生は、青少年をとりまく社会的状況とどのような関係があるのか、を問うならば一定の時期とその時期がそうぐうした社会的状況を発見することができるのである。その発見が、いかに実践的な要請を受けた教育相談の事例からといえようとも、事例数の多さとその質の深刻さは、事実のもつ重みをもって、私にある推測をなさしめるのである²⁾。

もはや、こうした青年期のかかえる“発達の危機”は、いわゆるこれまでのカウンセリングの領域をもってして、いわば、対症療法的に解決されるものではなく、今、かかえている青年期をどうつかみなおすのかにかかった問題を内に秘めているといえよう。

青年に、青少年をもつ親たちに、教師たちに寄与する

青年心理学を構想したいという願いは、いわゆるアカデミズムにはなじまないものであろうか。けっして、そうではない、と確信しているのだが……。

私は、今日の、とりわけ、60年代、70年代そして80年代を迎えた青年心理学界(内外)に、期待を寄せている。私自身も、その期待の内にありたいと願っている。

それは、前述のように、約100年の科学的青年心理学史の中に、ここ20年は、「画期的な業績」をきざみこんだからである。その動向を素描したい。その文献探索の研究の中で書評すべき3つの文献を位置づけたい。

過去20年間の青年心理学界の動向が、それ以前の動向とちがって次の三点の特徴を見いだすことができるという点で画期的であり、以後の学界の発展に新たな展望を期待したいのである。

そのひとつは、Journal のあいつぐ創刊である。ふたつには、それまでの研究のまとめ・総括的論文集の刊行であり、他は、その集約ともよべる初の青年心理学の Handbook の公刊がなされたことである。

・ Journal の創刊

“ADOLESCENCE” U. S. A, 1966創刊

“Jugendforschung” D. D. R, 1967創刊

“J. of Youth and Adolescence” U. S. A, 1972創刊

・ 総括的論文集の発刊 (代表的なもののみをあげる)

R. E. Grinder ed. (1963) : Studies in Adolescence, The Macmillan Company. (56名の執筆者)

J. F. Adams ed. (1968) : Understanding Adolescence—Current Developments in Adolescent Psychology—Allyn and Bacon. (23名の執筆者)

D. Rogers ed. (1969) : Issues in Adolescent Psychology, Appleton-Century-Crofts. (53名の執筆者)

G. Caplan & S. Lebovici eds. (1969) : Adolescence : Psychological Perspectives, Basic Books Inc. (32名の執筆者)

依田 新ほか編 (1973) : 『現代青年心理学講座』全7巻, 金子書房 (42名の執筆者)

・ Handbook の公刊

J. Adelson ed. (1980) : Handbook of Adolescent Psychology, John Wiley & Sons, 597 ps. (編者の J. Adelson は、前掲“J. of Youth and Adolescence”の associate editor である。なお、本書の contributors は23名で構成されている。その学徒は、U. S. A 20, Canada 1, England 1, South Australia 1 である)。

なお、これらのアメリカを中心とする青年心理学界の動向をおのおのの時点においてわが国での紹介がなされたことも注目すべきであろう³⁾ (ただし、Journal の創刊の青年心理学界の歴史的意義、さらに、私を含めて、社会主義諸国における青年心理学界の動向についての紹介、文献探索はわが国においておこなわれている)⁴⁾。

また、わが国にあたっては、心理学界よりも教育学界における意欲的かつ組織的な青年期の発達研究に注目すべきであろう⁵⁾。

これら一連のアメリカを中心とした青年心理学界の動向の中でどのような理論構成が蓄積されてきたのでしょうか。私は、本稿冒頭で H. Thomae (1974) の見解を引用し、その見解を支持したものであるが、今、ここでその根拠を示さねばならないでしょう。

E. K. Beller (1968)⁶⁾ は、60年代までの青年心理学の理論構成を次の6つの理論的潮流にあると言及したのであった。それは、今なお続いているといえよう (欧米にあっては)⁷⁾。

- ① Biological theory
- ② Psychological theory
- ③ Psychological and sociological theory⁸⁾
- ④ Sociological theory
- ⑤ Psychoanalytic theory⁹⁾
- ⑥ Anthropological theory.

おもえば、これら理論構成は、青年心理学界固有の、いわば、青年心理学研究のオリジナルとして構想された理論とはいえがたく、他の隣接科学の理論を青年心理学に導入したものといえよう。

たしかに、以上、述べたように、60年代以降80年代にかけての20年間は、青年心理学界史にあつて「画期的な業績」がみられたのであるが、残念なことに、青年心理学としての「固有性」を発見するにはいたっていない。まさに、今なお、H. Thomae (1974) のいう“混迷ともいえる現状”なのである。

ちなみに、Journal の創刊後の原著論文は Identity に傾斜し、発達の視点からの原著はきわめて少なく、今日に至っていることを付言しておこう¹⁰⁾。

おもえば、G. S. Hall (1904) が、初の青年心理学を構想した折の彼の書名から今なお飛躍できずにおるといえばいいすぎだろうか (G. S. Hall, Adolescence; Its Psychology and its Relations to Physiology, Anthropology, Sociology, Sex, Crime, Religion, and Education, 1904)。

しかし、このように“混迷ともいえる青年心理学界”の現状のみを述べるのが本稿の目的ではない。

Handbook の公刊と Journal の創刊は、必ずや、新たな展望と真の飛躍 (青年心理学としての「固有性」——いわば、科学としての青年心理学、私は、その中味を発達心理学の射程内での青年期研究を期待するものであるが) がもたらされるものと信じている。その展望を青年のみならず、青年期教育を担う教育関係者は強い期待をもって青年心理学界の動向に注目しているといえよう。

そこで、私はその契機をまず、前述した Handbook に求めたいのである。書評すべきひとつは、この Handbook である。

J. Adelson ed. (1980) : Handbook of Adolescent Psychology, John Wiley & Sons 597 ps.

まず、本書の構成を紹介しよう。

- I. New Perspectives on Adolescence
 1. Adolescence in Historical Perspective
 2. Perspectives on Adolescence from Longitudinal Research
 3. The Psychodynamic Approach to Adolescence.
 4. The Biological Approach to Adolescence
- II. The Processes of Adolescence
 5. Identity in Adolescence
 6. Ego Development in Adolescence
 7. Thinking Processes in Adolescence
 8. Values in Adolescence
 9. Moral Development in Adolescence
 10. Political Thinking in Adolescence
 11. The Development of Sexuality in Adolescence
 12. Friendship and the Peer Group in Adolescence
 13. Strategic Interactions in Early Adolescence
- III. Variations in Adolescence
 14. Psychopathology in Adolescence
 15. Variations in Adolescent Psychoharmonic Development
 16. Delinquent Behavior in Adolescence
 17. The Gifted Adolescent
 18. Youth Movements

以上の構成でもわかるように、これまでの青年心理学の研究史をふまえ、かつ、今日の課題を明確にすべく領域設定がなされているといえよう。その点においては、

今後の青年心理学の研究課題のありようを提起しているといえよう。とくに、Political Thinking を独立し、かつ重要な領域として設定したことに注目したい¹⁴⁾。

ただ、領域設定について若干の疑問も残る。

その一つは、Identity と Ego Development をおのおの独立に領域を設定することの積極的意義はどこにあるのか、ふたつには、Personality の領域を分散したことによって青年期の人格発達、いわば青年をトータルにみる視点を欠いてしまうのではないのか、等々。

しかし、本書の Handbook としての公刊の意義は、なんといっても第 I 部 New Perspectives on Adolescence にあろう (第 II 部、第 III 部は、これまでの青年心理学の動向をふまえての構成であるが故に、前述したような一面を残しながらもやむをえないことといわねばならない。個々の領域での論稿は、これまでのそのおのおのの領域の研究成果の到達点とその文献を探索するのはきわめて有効な内容をもっているといえよう)。

第 I 部の展望にあって、本書は、次の 2 つの点を力説しているのであるが、その見解は今後の青年期研究 (青年心理学に限らず) に必須な要件と考えることができるうえて、私は、高く評価したい。

そのひとつは、青年期の歴史展望を強調していることと、他は、あらためて縦断的研究 (follow down であれ、follow up であれ) のたいせつさを強調している点である。

これまで欧米で公刊された青年心理学書の多くは、常に“現代”を時間軸にすえて、“今日の青年群像”について論究されてきたものが多かったのである。いわば、青年期の歴史研究は欠落していたといえよう。

M. Mead の研究にまつまでもなく、今や青年期なる発達相は歴史的社会的にも、いわば意図的に、その時代、時代に創造されてきたという人類史を疑うことはできないのである。つまり、今日の“青年”は、現代史を背おって、その青年らしさを発現しているのである。この視点を抜きに議論される青年論は、単純な現象記述的に終わってしまうことであろう。

いわば、歴史の流れの中で個々の青年の個体発生史をたんねんに、かつ、ていねいに把握することの必要性をといた本書の意義は大きいといわねばならない。とくに、精神分析学的発想を根づよくもつアメリカ青年心理学界からの発言として私は注目せざるをえないのである。Political Thinking を独立して扱おうとする視角は、こうした考えの延長線上にあるのかもしれない。

ひるがえって、わが国の今日の青年心理学界にあってはどのようなであろうか。

次の業績に注目したい。

平山和彦 (1978)『青年集団史研究序説 上, 下』新泉社

本書の著者平山和彦氏は、青年心理学徒ではなく、民俗学・歴史学界で活躍している学徒である。

歴史における青年期の発生基盤を解明すべく研究の必要性が問われながらも、その問題意識をあたためる学問的余裕のないまま今日に到っているわが国の青年心理学界にあって本書の公刊はわれわれに多くの示唆を与えずにはおかぬであろう。

今日の青年の存在が、何か見えにくくなっているといわれて久しい。それ故に、今や、細分化した科学のひとつの分野をもって青年像を描ききすることは困難になっている。ましてや、社会の側からの青年への要求が不鮮明になっている時代にあつては、青年期の歴史的発生基盤からみて一層、わからない、あいまいな発達相に「変質」しつつあるかのようにさえおもえる今日、その肯否はあるにしろ青年を青年たらしめようとした歴史性に学ぶことは現代の青年性を分析する鍵を提供してくれるのではないかとおもう。

これまでも民俗学、歴史学、家族学等の諸分野からわが国の通過儀礼に関する研究は、多く発表されてきた。しかし、その多くは、断片的というおうか、少なくともわが国の近代にまたがってのものではなかった。

本書は、著者自身が述べているように、まさに、わが国の近代の夜明け、戦前の軍国主義、ファシズム形成期に青年らしさを政治的にも社会的にもいかに準備されたものかをあますところなく分析している。

「本稿は、明治期から昭和初期を中心とする若者組および青年団 (青年会) の民俗学的・歴史学的研究である」(本書 上 1)。

今日の青年研究にあって、われわれは、過去の歴史的教訓に学び、真の青年らしさを平和の枠組を守りながら追求すべく責務を負っているといえよう。そのためには、新しい視角が青年分析に求められているといえましょう。

さて、本書の構成を紹介しよう。

第 I 部 若者組の民俗学的研究 (上巻)

第 1 章 成年式と一人前

第 2 章 若者組の自主性論

第 3 章 若者組の構成員規制

第 4 章 若者組の諸機能

第 5 章 各地にみる青年集団の実態

補 論 娘組研究の課題

第Ⅱ部 「官制」青年団の史的考察(以下、下巻)

第1章 明治末大正期における青年団対策

第2章 中央指導機関と全国組織の沿革

第Ⅲ部 自主的青年団運動の研究——長野県下伊那郡
青年会をめぐって

序 章

第1章 下伊那における自主青年団の前身(江戸末
期~大正初期)第2章 青年団自主化の胎動とその諸条件(大正4
~9年)第3章 自主的青年団の成立の展開(大正10~昭和
3年)

第4章 自主的青年団運動の衰退期(昭和4~7年)

結 語

わが国にあっての青年期の歴史的発生基盤は、若者組にあると断言できよう¹²⁾。青年なる概念の使用は明治に入ってからのものである¹³⁾(もちろん、青年に類する“青春”なる語源は古く、それは、中国、唐の時代にみられ、今日の“玄人”の語源と同一の源をもっている¹⁴⁾)。

それ故、若者組の実態と青年団の発生とその内容を知ることが、近代日本の国づくり(いわば国策なのだが)とかかわって、どのような青年性とその世代性が社会的かつ政治的につくりだされたかを知ることであり、それが現代において、何故に、どのように新たな青年層をつくりだしたのかを知る手がかりを与えてくれるとおもう。

本書の著者平山氏は、現代の日本の“成年”のあいまいさを述べて、次のように語っている。

「このように、成人の基準が内実においては多様化し、成人式が形骸化を深めたのも、根本的に現代社会がきわめて複雑多様なものになってきたことに基因していることはいうまでもない。そのために、成年基準や成人式も名目的なものとなり、複雑な現実と青年たちの多様な意識(それは青年層のあいだでも、また各個々人の内部でも生起している)からはすっかり遊離してしまったのである」(本書 上巻 21ページ)。

どうやら、成年、成人の内実が見えない時代こそが現代なのかもしれない。しかし、だからといって、子ども(未成体)とおとな(成体)の間に、いわば、生物学的には「準成体」ともいえる発達相を青年期とよんだ先人たちの知恵は無意味なものではない。なんとかして、人間固有の、この青年期を青年自身そしておとなたちがより具体的にみえる(青年期の発達課題)状況を現代史の中に発見する作業が今や求められているといえよう。

本書は、われわれ青年心理学徒にその作業の必要性和青年論の視角を与えてくれるものである。専門のちがいがあって本書の「書評」を述べることはできない。しかし、たんねんに、ていねいに史実にそっての論稿であることは門外漢とてわかるすぐれた学術書である。著者平山氏に私は青年心理学徒としてその寄与に感謝せずにはおれない。

前述した Handbook は、こうした探究に意義を認めてはいたが、その具体的探究のいわば学際的研究の寄与について多くを語ってはくれていなかったことを付言しておこう。

私は、今日の青年心理学界に求められる重要な視角は、“青年期研究に発達の視点を”より具体的に研究テーマを設定するならば、“青年期の発達とその質的転換期(節)をめぐって”であろうと提言したいのである。先にも述べたように、今日の青年問題は、青年期の発達の危機の負の表現である(青年運動・学生運動という事態の低迷にあって)。

どうやら、一人前どころか、あまりにも多くの「手のかかる」青年たちをかかえこんだ時代こそ現代社会といえるようにおもえてなりません。それは、“発達と教育”の視点を乳児、幼児、児童期同様に考えねばならない一面を物語っているようにおもえる。

この問いを背おって前述した歴史研究にその系口を求めたのであった。そして今、もうひとつの事実に私は注目しようとしているのである。それは……。

沢田 昭(1982)『現代青少年の発達加速』創元社

著者、沢田氏は、今、遠い世界に旅立っている(1980. 6. 9, 51歳で逝去)。

本書は遺稿として刊行された。

1961年, 1964年, 1967年, 1972年, 1977年と5次にわたるわが国初の全国平均初潮年令を求めた調査(標本はなんと約84万~10万——小5, 小6, 中1, 中2, 中3——に達している)を主なるデータとして今日の成長・成熟加速現象を発達論的に究明した貴重な文献である。

青年期の発達の姿を基礎づける生理学的土台を解きあかし、今や、その加速度的ともよべる成長・成熟レベルの前傾化現象がどのように発達の次元に反映するものであるかを問い続け世を去った著者沢田氏の意志をわれわれはうけつぐ責務を負っているといえよう。

紙面が限られていること故、本稿で私はこれ以上の言及ができない。しかし、今日の青年心理学界に与えた影

響の大なることを記してペンをおく。

注

- 1) Thomae H. & Endo T. eds. (1974) : The Adolescent and His Environment; Contributions to an Ecology of Teen-Age Behavior, Karger S. (『教心研』23, ①に「書評」を記した。秋葉, 1975).
- 2) 拙著 (1981)『育ちあいの子育て』労働旬報社.
- 3) 塚田 毅編 (1970) : 青年心理学に関する最近の研究, 『教心年報』, 9, 67-110.
村瀬孝雄 (1972) : 青年期的人格形成の理論的問題——アメリカ青年心理学の動向——, 教心研, 20(4), 250-256.
- 4) 貴重な文献として, 宮川知彰 (1969) : D. D. R. における青年心理学の展開 (1), (2), 『ソビエト心理学研究』, 8, 1-24.
- 5) 日本教育学会は, 学会としての課題研究として“青年期の教育と学校階梯”をとりあげ (1980), 以後, 学会とし次のような研究委員会を設置し, 研究活動が続けている (『現代社会における発達と教育』研究委員会).
- 6) Beller E. K. (1968) : Theories of Adolescent Development (in. J. F. Adams ed. Understanding Adolescence—Current Developments in Adolescent Psychology——, Allyn and Bacon, 102-133, 1968).
- 7) とりわけ, 今日の青年心理学界の主要な理論的動向は, 本文③, ⑤である。それらの理論的潮流の主導的なものを以下, 注8), 9) に示す。
- 8) Goslin D. A. ed. (1969) : Handbook of Socialization Theory and Research, Rand McNally College Pub. (わが国においては, 岡路市郎が, “社会的青年心理学”として, この理論的動向を紹介している。岡部市郎, 青年心理学の系譜, 依田新ほか編 『現代青年心理学講座 第1巻』, 金子書房, 1973).
- 9) Erikson, E. H. (1968) : Identity; Youth and Crisis, Norton, W. W. Blos. P. (1970), The Young Adolescent; Clinical Studies, The Free Press. (わが国においては, 西平直喜が, “自我心理学的青年論”として, この理論的動向を紹介している。西平直喜, 青年心理学の隣接領域 所収, 前掲, 依田 新編).
- 10) 例えば, J. of Youth and Adolescence の原著論文の領域をみると Identity 関係20%強であり, Development 関係はわずか2%弱である (Vol. 1—Vol. 11まで)。
- 11) かつて, 私は, 青年期研究に, とりわけ青年心理学研究に青年の政治的態度形成の課題がすえられていなかったことに疑問とその問題を述べたことがある (拙稿「政治的社会化に関する研究——青年期を中心として——」『教心研』, 17, 229-236, 1969).
- 12) 拙 稿 (1978) : 人間社会の発展と青年 (所収, 宮川知彰・寺田 晃編『青年心理学』福村出版).
- 13) 徳富蘇峯 (1885) : 「19世紀日本の青年 およびその教育」に青年論の端初があるといわれ, 森鷗外 (1910) の『青年』は, わが国初の文学史上での“青年”の登場といわれている。
- 14) 拙 稿 (1976) : 青年 (期) とはなにか, 『教育』, 327, 6-13.
拙 稿 (1981) : “人生の節”を探る「朝日新聞」, 10. 21付.